

2004 年度

第1回 教師教育研究フォーラム	
日 時	プログラム
2004 年 7 月 21 日(水) 13:00～17:00	主題：一教員の専門的力量とは何かー 第1部 基調報告 13:00～14:30 発言者 英国ブリストル大学教授 M・クロスリー 早稲田大学教育学部教授 白石 裕 司 会 早稲田大学名誉教授 鈴木 慎一 通 訳 早稲田大学教研DC 吉村 美紀
会 場	
早稲田大学学術情報センター 国際会議場	
備 考	
第3回フォーラムの報告	第2部 教育現場から 14:45～17:00 発言者 横浜市立丸山台小学校長 長瀬 欣之 武蔵野市立第五中学校長 續 恭司 千葉県立佐原高等学校長 秋山 和意 東京都教育相談センター所長 池田 敬史 司 会 教員就職指導室・運営委員阪田 信子・三浦 正尚 第3部 交流会 17:00～18:30 司 会 東京都立府中東高等学校教諭・運営委員 関根 荒正
第2回 教師教育研究フォーラム	
日 時	プログラム
2004 年 10 月 3 日(土) 13:00～17:00	挨拶 副所長・早稲田大学名誉教授 鈴木 慎一 第1部 基調報告 13:00～15:40 主 題 「教師養成と教育評価」 発表者 全米教師教育大学協会総裁 D. イミッグ 文部科学省初中局教職員課 戸渡 速志 前東京都立竹早高等学校長 磯山 進 埼玉県立熊谷西高等学校長 館野 俊則 川崎市教育委員会 長井 節子 早稲田高等学院 榎本 隆之 司 会 副所長・教育学部教授 岡村 遼司 運営委員・早大講師 小川 輝之 通 訳 早大教研DC 吉村 美紀
会 場	
早稲田大学学術情報センター 国際会議場	
備 考	
第4回フォーラムの報告	

	第2部 質疑応答 16:00～17:00	
	コメント 運営委員・横浜市立篠原小	安達 昇
	運営委員・元淵江高校長	清水 洋三
	運営委員・両国高校	関根 荒正
	運営委員・区立葛西中学校長	太郎良 博
	フロア意見聴取 運営委員・教員就職指導室	三浦 正尚
	運営委員・教員就職指導室	阪田 信子
	通 訳 早大教研DC	吉村 美紀
	第3部 交流会 17:15～19:00	
	場 所 大隈会館 楠亭	

主題「教育の今を考える」

近頃、子どもにかかわる出来事がいくつも起こり世の中に大きな衝撃を与えています。子どもたちはいじめ、暴力、殺人へと深刻化する一方で生きること絶望して自らの命を絶つということも起きています。まさに教育そのものが問われているのです。このような状況など今の教育現場を様々な立場から報告しながら、教職をめざす学生、学部、大学院の皆さんをはじめ関心を持っている方と共に考えていく連続フォーラムを企画しました。講義のような一方通行ではなく、双方向で熱い議論も行えるようにできたらと考えていますので、多くの参加を望んでいます。当日直接会場へおいで下さい。もちろん参加費など必要ありません。

2004年10月1日

早稲田大学教師教育研究所
所長 津本 信博

開講スケジュール

第1回 テーマ「いのち」の授業を考える

ー子どもと親は「いのち」とどう出会っているかー

講師 安達 昇（客員研究員・小学校教員）

日時 10月13日（水）午後4時30分から6時

場所 16号館2階 教育学部大会議室 *持ち物ーはさみ、のり

第2回 テーマ「いのち」の授業を創る

ー「いのち」の教材と授業実践ー

講師 安達 昇（客員研究員・小学校教員）

日時 10月27日（水）午後4時30分から6時

場所 16号館2階 教育学部大会議室 *持ち物ー色鉛筆

第3回 テーマ「生徒・社会・教師の絆による主体的な学びのプログラム」

ー今求められている真の学び、これからの教育とはー

講師 谷口 理（客員研究員・高校教員）

日時 11月22日（月）午後3時から4時30分

場所 16号館2階 教育学部大会議室

第4回 テーマ「NIE概論ー新聞を活用した授業」

ー今注目されている新しい教育方法としてー

講師 吉成勝好（客員研究員・前小学校長）

日時 11月30日（火）午後3時から4時30分

場所 14号館8階 社会科学部大会議室（予定）

講座内容・講師紹介

第1回 テーマ「いのち」の授業を考える

ー子どもと親は「いのち」とどう出会っているかー

第2回 テーマ「いのち」の授業を創る

ー「いのち」の教材と授業実践ー

「いのち」に関わる痛ましい出来事が私たちの記憶に消えないうちに起こり続けています。事件が起きるたびに「いのち」の大切さ、生命尊重を声高に説く声が聞こえてきます。子どもたちに「いのち」の大切さを話せば話すほど、子どもの現実から遠くなっていき、話は説教調になるという皮肉な結果がありました。

今回のフォーラムではワークショップを取り入れて一緒に学びます。一人ひとりが主役です。子どもや親がどのようにいのちに出会っているのか、また参加者とともにわたしが開発した「いのち」の教材を学習しながら「いのち」について考えていきたいと思います。

第1回は次のことを考えます。

「いのち」について・親から学んだこと・子どもからの便り・いのちに出会う子どもや保護者・子どもの詩「会いたくて」・「いのち」の教材「生きていくために大切なものは」の学習をし

ていのちを考える。子どもとの授業実践報告

第2回は次のことを考えます。

「いのち」の教材を考える・参加体験の学習方法・学習の進め方と学習過程

「いのち」の教材「いのちの色」を考える・「いのち」の教材「いのちはどこだ」を考える・子どもとの授業実践報告

講師：安達 昇（客員研究員・神奈川県横浜市公立小学校教員）

学生時代から人権問題に取り組む。教員になってから「人権・人間関係・いのち」をキーワードに参加体験型の学習方法を取り入れた授業プランを開発し実践している。

編著書 『「いのち」を考える授業プラン4』（小学館 2000）

「「いのち」を考える授業実践」（『学校知を組みかえる』学文社 2002）

『「省エネ」を考える授業プラン53』（（財）省エネルギーセンター 2003）

第3回 テーマ「生徒・社会・教師の絆による主体的な学びのプログラム」

ー今求められている真の学び、これからの教育とはー

病院に行ってコンサートをする／震災復興住宅で高齢者と交流する／日野原重明先生や黒岩キャスターを訪ね生き方を教わる／大手企業で商品開発に加わる／百貨店の催し会場を企画する／国際災害報告の翻訳ボランティアをする／生け花をして、近隣にメッセージカードを添えて訪問する／小学生に授業を教える／近隣の育児教室に参加する／一流ホテルで接客する／能面をつけて能舞台上に立つ／街の中心街に行って踊りを披露する

これは勤務校・松蔭高校で実施してきた「チャレンジプログラム」という主体的な学びのプログラム群のほんの一部です。（昨年度は全部で90近くのプログラムがありました。）

いじめ、不登校、学力低下、受験戦争、教育の荒廃が叫ばれて久しい。しかし、本来学校はもっと楽しい学びの場で、若者は限りない活力を持っている。夢や目標は、高校卒業や大学合格で終わらず、常に学び続けていくべきで、学校はそんな機会を設けるべき。そんな願いを込めて発足したチャレンジプログラムに、生徒達も実に前向きに取り組み、数々の感動体験をし、多くのことを学び、NHKや各新聞でも10数回にわたってとりあげられました。

多様かつ、変化の激しい時代にあって、生きる力を身につけるような真の学びとは何か、これからの日本の教育はどうあるべきか、そして、これからの学校教育に求められていることは。

空間的にも、時間的にもボーダレスな時代になり、教室、あるいは学校の敷地内だけで、教師が教科知識を教える時代は終わろうとしている。卒業や大学合格で学びのカリキュラムが時の歩みを止める時代も終わろうとしている。企業や社会全体が教育への参画の意識を持ち、一方、学校は社会の人材とも連携し、卒業という区切りにとどまらず学び続けるための、魅力的で主体的な学びの提供、あるいはコー

ディネートをしていく。そういうことがこれからの学校教育に求められています。

今回のフォーラムでは、チャレンジプログラムという4年間の現場の実践例を元に、日本の今後の教育に対する提言をしてみようと考えています。これからの時代に応じた教育はどうあるべきか。多くの学生の参加を期待しています。教育を熱く語りあい、実りある時間を持ちましょう。

講 師：谷口 理（客員研究員・兵庫県私立高校教員）

早稲田大学教育学部卒。兵庫県私立松蔭中学高等学校に勤務、現在に至る。

進路指導担当教諭として、目標意識と前向きな姿勢を育てるべく、大学合格で終わらない進路指導体系を確立していく中で、地域社会と連携しつつ、卒業後の生きる力につながる主体的で感動的な体験活動の学びのプログラムを4年間にわたって築いてきた。

チャレンジプログラムのホームページ

<http://www.shoin-jhs.ac.jp/nextstage/challenge>

第4回 テーマ「NIE概論—新聞を活用した授業」

—今注目されている新しい教育方法として—

NIE (Newspaper In Education) とは？

新聞（一般商業紙）を教材や学習材として学校教育に役立てる教育方法のことで、日本では「教育に新聞を」と訳されています。また、この教育方法を現代の教育改革の一環として広めていこうという教育運動の名称としても使われます。もともとは、アメリカの新聞界が若者の活字離れに危機感を抱き1950年代に始めた運動ですが、今では、世界40か国以上で推進されています。

日本では、1985年の新聞大会で日本新聞協会から提唱されたのが始まりです。一般紙を教材として活用する実践はずっと以前から意欲的な教師によって行われてきましたが、現在のNIEは、

- ①環境・国際理解・福祉など、今までの教科の枠では捉えきれない現代的な教育課題に極めて有効に対応でき、「総合的な学習」の展開にも役立つ教育方法として新しい役割を担ってきている。
- ②今までの新聞利用学習が、個々の教師による自主的な（ある意味ではゲリラ的な）個別実践として行われてきたのに対し、新聞界と教育界との協力による教育運動として推進されている。また、新聞紙面改革運動としての面も持った運動である。
- ③今までの活動が、教師が新聞を切り抜きコピーして教材や資料として子どもに与えるという形が一般的だったのに対し、NIEでは、子ども自身が新聞そのものを学習材としてどう活用するかに重点をおいている。

このような違いがあります。

新聞界では、NIE事業を推進するため、平成10年4月に（財）日本新聞教育文化財団を設立しました。財団から新聞提供を受けて研究・実践を行う「NIE実践校」も、小・中・高校を対象に全国各

都道府県それぞれ４パーセントの指定を目指し広がっています。ＮＩＥの研究・実践・普及の推進母体として、全国全都道府県に「ＮＩＥ推進協議会」または「ＮＩＥ推進委員会」という名の組織ができています。東京都ＮＩＥ推進協議会には、東京都小学校新聞教育研究会・東京都中学校新聞教育研究会・東京都高等学校新聞教材開発研究会の３教育団体と、朝日・毎日・読売・日経・産経・東京の在京６新聞社が組織参加しています。

今回のフォーラムでは、日本におけるＮＩＥ運動の歴史、小・中・高校でのＮＩＥ授業の実際、問題点や課題、今後の動向等について、概観します。これから教職を目指す方々にとって、有効な情報を提供できるでしょう。

講 師：吉成勝好（客員研究員・前東京都公立小学校長）

1967 年、早稲田大学第一政経学部政治学科卒。玉川大学教職課程修了。民間研究所・企業等に勤務後、1977 年より東京都公立小学校教諭。練馬区立中村小学校長、同大泉第二小学校長、東京都小学校新聞教育研究会会長、東京都ＮＩＥ推進協議会会長、全国新聞教育研究協議会会長など歴任。

編著書 『新聞を使った総合学習実践集』（岩崎書店）

『学年・学級通信の作り方』（文教書院）

『学校百科・新聞を作ろう』（クロスロード）など